

関係代名詞の省略についての考え方

小寺 茂明

1. はじめに

関係代名詞については、日本語には存在しないということもあり、たいていの日本人学習者は悩まされているはずである。特に、その省略については十分に指導されていないせいもあって、その正確な習得は難しいのではないかと思われる。以前に本誌に「関係代名詞とその考え方について」(No. 63)を執筆して以来、この関係代名詞の省略について、通常の学校での説明などよりも、より合理的で例外の少ない説明ができないものかと気になっていた。ここではその省略についての考え方を中心に検討してみたい。

ところで、関係代名詞の指導と言えば、中学校ではそれに先だって、いまや多くの場合、接触節から指導が始められる傾向にある。そして、それはそれなりに理由のあることである。接触節は文法的には関係代名詞の省略されたものと見ることが可能であり、典型的な後置修飾の1つである。そして、それは関係代名詞への橋渡しの役をするものと考えすることもできよう。それに接触節は口語の比較的やさしい表現の中で多用されるものであり、それを重視することはコミュニケーション重視の立場からも意味のあることである。

ただ、接触節を関係代名詞の省略という観点から見れば、それは明らかに文法上の情報が省かれているということにほかならない。関係代名詞の省略ということは、とりわけ外国語としての英語学習者には文法上の難易度が上がってしまうことが少なくないということでもある。英理解のための手がかりがそれだけ減少してしまうからである。もちろんそれでも、接触節は用いられるが、その際の母語話者の判断にはどのような原理や考え方が働いているのであろうか、それはいささか微妙なところではあるが、興味のもたれるところである。ここではそのことを含めて考えてみたい。

2. 学校文法での扱い方

学校文法では関係代名詞の省略について、基本的には目的格の場合には省略することができると指導されている。そして、主格については原則的には省略されないが、例外的に省略される場合があるとして、そのいくつかのケースが示される、というのが一般的な指導であろう。ということは、実際にはかなりの例外を認めざるを得ないということである。関係代名詞は単に、

(a) 主格の場合には省略されない

(b) 目的格の場合には省略される

というような指導ですむのならことは簡単であるが、実際の英語では例外が少なくない。その意味でも関係代名詞の省略についての、より合理的な説明がほしいところである。

まず、主格の場合には省略されないはずであるが、それにもかかわらず省略されている例がある。次のような例がJespersen(1933: 361)に見られる。(thatを補った形で示す。)

(1) I am not the man (*that*) I was when you knew me first.

(2) It isn't every boy (*that*) gets such an open chance like that.

(3) She taught me the difference (*that*) there is between what is right and what is wrong.

(4) By the time (*that*) I had told my mother, they had all left.

それぞれ、補語のとき、It is, There is, Here isなどのあとにくるとき、先行詞のあとの節がthere isで始まるとき、関係副詞の代用としてのthatのとき、ということになる。(ただし、最後の場合についてはここでは議論しない。)

次もやはりJespersen(1933: 361)からの例であるが、これらは普通の関係代名詞の目的格の例であり、しばしば省略されるものである。(関係代名詞

を補った形で示す.)

(5) It was all (*that*) he could do to keep from screaming. (動詞の Object)

(6) The family (*whom*) he lived with simply adored him. (前置詞の Object)

ところが、実は目的格であっても省略されない場合があり、それについて検討してみると、以下の例に見るように、先行詞と関係代名詞節の主語との間に副詞句や前置詞句があるなど、その両者の間になんらかの言語的な距離がある場合が考えられる。

(7) The chance *that*, unfortunately, he missed last time would never come again.

(惜しくもこの前に逃がしたチャンスは再び来ることはあるまい)

(8) This is one of the regulations *which*, in my opinion, we should do away with.

(私の考えでは、これは廃止すべき規制の1つである)

——江川(1991³: 85)

江川(1991³: 85)には「unfortunately や in my opinion という挿入語句の介在が関係代名詞の省略を妨げていることに注意されたい」との指摘がある。副詞語句のために、先行詞と関係代名詞節の主語とが隔てられているのである。

以上のように、関係代名詞の主格でも省略されることがあり、逆に目的格でも省略されないこともあるのである。格のいかんにかかわらず、その省略には多くの例外があることになる。そこで、もう少し汎用性の高いルールはないものかという視点からの検討を要するゆえんである。

3. 省略のルールをめぐる新しい考え方

さて、関係代名詞の省略については比較的新しい考え方がある。その考え方は岡田(1986)、吉田(1995)、江川(1991³)などに見られるものである。ここでは吉田(1995: 142)からの用例をあげてみよう。

(1)a. Mary is not the woman (*that*) she used to be. (補語)

b. *That's all *which* there is to the matter.

c. That's all there is to the matter.

(there is ~)

d. There's a gentleman (*who*) wants to see you. (There is ~)

e. This is an answer (*which*) I doubt will ever satisfy your teacher. (連鎖関係詞節)

——以上、吉田(1995: 142)を参照

これらは主格でも省略される場合の例であり、普通の学校文法では例外とされるものである。例外の具体的なケースとしては、(1)の例に見るように、次の4つの場合がある。

(a) 補語の場合

(b) 先行詞+there is ~の形の文の場合

(c) There is ~で始まる文や強調構文などの場合

(d) 連鎖関係詞節の場合

それぞれについて簡単に検討してみよう。まず(a)の場合を見ると、(1)aで関係代名詞が省略されると、その前後にthe womanとsheとが残る。この場合、2つの名詞句が連続する現象に着目する必要がある。しかも、あとの名詞句が人称代名詞であることにも注目すべきである。それは接触節の特徴だからである。そして、このような名詞句の連続は、その間になんらかの関係代名詞があってもおかしくないと推測できるところである。結局、関係代名詞が省略された結果として名詞句の連続が生じ、名詞句の連続は関係代名詞省略のサインなのであると考えてよい。

次に、(b)の場合のthereをどう考えるかであるが、thereが名詞であると考えられれば、(a)の場合と同じ説明が適用できることになって都合がよい。これは形式主語と言われることがあることから示唆されているが、また付加疑問文を作るときなどを見てもわかるように、thereは、~ isn't it?などの場合のitと同じように振る舞うことから、文法的にはそれはitと同じ資格のもので、一種の代名詞と考えることが可能である。そうだとすれば、(1)cで見るとall thereという語連続が生じていて、この場合も名詞句の連続であるとしてよいことになる。つまり、その間にthatが省略されていると考えてもなんら不自然ではないということである。

さらに、(d)について見てみよう。やはり(1)eでも、関係代名詞が省略されるとan answerとIという名詞句の連続が見られることになる。考え方は

上の(a), (b)の場合とまったく同じである。

ところで、この構文は高校生には少しレベルの高い関係代名詞の用法かもしれないが、ほかの例としては次のようなものがある。

(2) We need an assistant *who I hope* will be a great help to us.

(3) We need an assistant *whom I hope* will be a great help to us.

(4) We need an assistant *I hope* will be a great help to us.

——金子(1997: 21)

これらの「(関係代名詞+)I hope」の例は挿入的な用法であり、関係代名詞の連鎖的用法とも呼ばれるものであるが、その意味は「私たちに大変役に立つと思えるような助手が必要である」である。

このうち、(2), (3)については関係代名詞の格が関係している例である。(2)は主格の *who* が用いられていて、文法的にはこれが正解である。(3)には本来主格がくるべきところであるのに、*whom* が用いられている。それは文法的には誤りであるが、実際にはときどき用いられるものである。そして、この「名詞句+名詞句」という構造には、すでに見たように、その間に何か関係代名詞があることを推測させるものであり、また、関係代名詞を用いるとすれば目的格を用いようとする心理(的メカニズム)が働くものと考えられる。

また、(4)については関係代名詞の省略および格についての判断が関係している例である。(4)のところに関係代名詞が省略されていると考えられる。)

(4) We need an assistant # *I hope* will be a great help to us.

who あるいは *whom* を補えば、それぞれ(2), (3)と同じになる。ただ、ここでの問題は、主格の関係代名詞であるのにそれが省略されているということである。

このような場合、主格であるのになぜ省略されるのか。それはおそらく、(3)の場合からも推測されるが、母語話者はこのような場合 *whom* を用いる、あるいは用いたくなるような直観をもつゆえに、普通の接触節と同じように感じるためではないだろうか。すなわち、言語感覚としては、最初の名詞句(つまり先行詞)が目的格であると感じられるのであり、それならその関係代名詞はおのずと省略して

もよいと考えられるのであろう。実は、ここの *an assistant # I hope* と普通の接触節の *the man # I know* とは構造的には同じものではないが、まったく同じ感覚で用いられるということである。本来的には目的格は適当ではないが、名詞句が連続するために、母語話者は目的格がそこに存在するかのよう錯覚するのではないと思われる。

最後に、(c)の場合についてであるが、それには *There is...., It is ~ that...., Here is....* などの場合がある。いずれも特殊な構文であり、例外的な場合であると見てよい。ちなみに、(1)d は見かけ上は制限的用法になっているが、意味は非制限用法に近いものである。ここの意味は「紳士がお見えである (*There's a gentleman*)、そして彼はあなたに会いたがっている (*and he*) wants to see you」となるのであり、いわば時系列的に解釈されるということである。そして、関係代名詞を省略した場合、*a gentleman* は文の前半と後半とでいわば一人二役をしていることになると考えられる。*a gentleman* は前半では新情報の真主語として登場し、後半では *wants* の主語として機能しているのである。かくして、この構文では *There's* も *who* も実質的にはほとんど意味をもたないと考えられるのである。このように *a gentleman* が二役可能ということは、関係代名詞は意味的にはほとんど不要と見てよいということになるのである。

以上の検討から、若干の特殊な構文の例外的な場合を除いて、省略が起きているのは「名詞句+名詞句」の構造をなしている場合であることが確認できたと言えよう。

一方、主格の場合の関係代名詞は、ふつうは「名詞句+関係代名詞(主格)+動詞」という構造をとっている。この場合は、「関係代名詞+動詞」の構造で *S+V* の従属節をなすものである。そして、その従属節の中では関係代名詞自体が *S* の働きをしていて、その関係代名詞がひきいる *S+V* の関係代名詞節全体が前の先行詞を修飾するのである。したがって、*S* の機能を有する関係代名詞が省略されることはない。接触節の場合もそうであるように、関係代名詞節でも *S+V* の形が維持されるのは当然である。もし *S* である関係代名詞が省略されてしまうと、関係代名詞節という節の形をなさなくなってしまうからである。

なお、筆者の関係している学習参考書である『デュアルスコープ総合英語』での扱いを見てみると、そこには次のような例文が見られる。

(5) Dr. Jones is a scholar (*whom*) many people respect.

(ジョーンズ博士は多くの人が尊敬する学者です.)

そして、そこには次のような解説が続いている。

目的格の関係代名詞は〈口語〉では *whom* の代わりに *who* も使われるが、下のように関係代名詞を省略する(何も使わない)のが普通。〈名詞+S+V〉の形を見つけたら、「関係代名詞が隠れているのでは?」と考えてみよう。

(6) Dr. Jones is a scholar many people respect.

V

S

—小寺(監修)(2010: 271)

そして、ポイントとして「〈名詞+S+V〉は関係代名詞省略の可能性大!」(p.272)との指摘があるのも、学習参考書としては興味深い指摘ではないかと思う。

さて、これまでの議論を整理してみると、関係代名詞の省略について、一般に言われている規則は次のようなものであったと考えられる。

規則(1): 制限的用法の場合に限り、目的格の関係代名詞は省略できる。主格の関係代名詞は省略できない。

ただし、主格の関係代名詞の省略という例外については、結論的には、先行詞と後続の(関係代名詞)節の中の主語という2つの連続する名詞句の間には、おそらく関係代名詞の *that* が省略されていると考えられるということになる。つまり、そのような2つの名詞句の連続は関係代名詞省略のサインと考えてよいのであった。かくして、新しい考え方は、むしろ格にはこだわるべきではなく、次の規則(2)が提案されたことになる。

規則(2): 関係代名詞は、直前に先行詞としての名詞句、直後にもう1つの名詞句が存在するならば省略できる。つまり、2

つの名詞句が連続するなら、その間の関係代名詞は省略できる。

4. むすび

以上、関係代名詞の省略について見てきたが、実は関係代名詞の省略は、文法的な格には必ずしも関係がないことがわかった。

そこでまず、たとえば次のような例を見ても、我々自身が違和感を覚えることがないように、このような口語的な省略表現の英語にもっと慣れる必要があるのではないかということが考えられる。

(1) I'm not half *the man I used to be*.

(2) We need *an assistant I hope will be a great help to us*.

そして、これらにあっては、特殊な構文の場合は別として、「名詞句+名詞句」のように2つの名詞句が連続しているものであり、名詞句の連続は関係代名詞省略のサインでもあることを、あらためて確認しておきたいところである。

参考文献

- 江川泰一郎(1964², 1991³)『英文法解説』, 東京: 金子書房.
- 金子 稔(1997)『現代英語・語法ノートII』, 東京: 教育出版.
- 小寺茂明(2010a)「関係代名詞とその考え方について」, *Chart Network*(『チャートネットワーク』(数研出版), No. 63, pp.1-5).
- 小寺茂明(2010b)『《チャート式シリーズ》デュアルスコープ総合英語 (*Dual Scope High School English*)』(監修, 四訂版), 東京: 数研出版.
- 岡田伸夫(1986)「関係代名詞の省略」, 『京都教育大学紀要』, Ser. A, No. 68, pp. 79-96.
- 岡田伸夫(2001)『英語教育と英文法の接点』, 東京: 美誠社.
- 吉田正治(1995)『英語教師のための英文法』, 東京: 研究社出版.
- 吉田正治(1998)『続 英語教師のための英文法』, 東京: 研究社出版.

(大阪教育大学教授)